

# ブレーメンの音楽隊

阿 部 卓 也

グリムの「ブレーメンの音楽隊」の話はよく知られている。ロバ、犬、猫、鶏、いずれも高齢で飼い主の役に立たなくなった4匹の家畜たちが、殺される運命を避けて、ブレーメンの町を目指す。「死ぬよりやましなことはどこへ行ったって見つかるさ」という名文句は、作家のカール・ツックマイヤーが作品で引用している。ブレーメンの真ん中の広場、市庁舎脇には、1953年に建てられた4匹のブロンズ像があり、町のシンボリックな存在になっている。

しかし驚くべきことに「ブレーメンの音楽隊」はブレーメンには行ってないし、当然、音楽隊にも入っていない。町に向かう途中の森で夜を迎えたとき、4匹は偶然「盗賊たち」の家を見つける。中を覗くと盗賊たちが豪華な夕食の最中。この悪い連中（盗賊ではない、動物たちだ）は悪知恵を働かせて、盗賊たちを脅かして出て行かせ、まんまご馳走にありつく。一度盗賊の手下が戻ってくるも、見事撃退して、そのままそこに居着いてしまい、安楽に暮らす。めでたしめでたし。と言うか、かわいそうな盗賊たち…。と言うか、ブレーメンと音楽隊はどこへ行ったんだ。

要するに、市民でも農民でもないアウトサイダー同士の分捕り合いの話なのだ。

そして ブレーメンの音楽隊 とは、4匹を結束させ、行動させる幻想、しかもかなり唐突な幻想である。なぜそもそも彼らがブレーメンに行って音楽隊に入らなければならないのか。事実物語の終わりで彼らがやっていることを見れば、それがまったく恣意的な幻想であることが分かる。

ブレーメンという固有名は元々の話にはなく、後で付加されたらしい。そもそも高齢で働けなくなった動物たちがブレーメンでなら音楽隊に入れて貰えると思うところが、当時のこの町の音楽のレベルに対する周囲の評価を反映していると考えられている。でも今のブレーメンの人たちはそんなことにはお構いなく、この話に愛着を抱いているようだ。

ではクイズ。グリムのテキストでは、ロバと犬は、音楽隊に行ってもそれぞれ何の楽器を演奏することに、というか、演奏するつもりになっていたらうか。

正解は、ロバがリュート（翻訳の多くで「ギター」になっている）、犬がティンパニ。蹄でどうやってリュートを弾くんだか。猫はセレナーデ（ドイツ語で「夜の音楽」Nachtmusik）が得意、鶏も声を買われており、いずれもヴォーカル志望だったと思われる。

（商学部准教授）